

小説国際プラント・ビジネス戦争（四）

杉田望

老人たちの密談

すでに午後六時を少しまわっていた。鎌谷康祐かまやこうすけを乗せた車は日経連会館を出て日比谷通りから大手町を抜け、隅田川の方角に走っていった。永代橋を過ぎると、やがて車は門前件町にかかる。

左手に富岡八幡宮をみながら、さらに一キロほど先を左手に曲がり、その裏街の路地に入ったあたりで鎌谷を乗せた車は幾分速度をゆるめた。道路はやや渋滞がみだった。日経連会館からわずか十五分ほどの距離だが、そこに鎌谷が馴染みにしている「浅田屋」があった。鎌谷を乗せた黒塗りの乗用車は「浅田屋」の玄関にぴったりと停車した。

玄関に鎌谷を出迎えた「浅田屋」の欠席は奥座敷に案内する。鎌谷は勝手知ったるわが家のように、朱色の絨毯の上をゆったりとした足取りで女将に続いた。奥座敷で待っていたのは千代田銀行の石井謙二頭取だった。石井は肩幅の広い長身の男だった。鎌谷の姿を認めると、長身を窮屈そうに曲げ、右手で上座を指しながら鎌谷に席をすすめた。

「それはいかん、今日はあなたが私の客だ」

そういって、鎌谷はさつさと下座に座り込んだ。挨拶を終え、女将が席を立った後は二人だけの対座となった。遠くから三味線の音色が聞こえてきた。ガラス戸の向こう側に小さな庭が広がっていた。静かな待合だった。すでに酒と肴の用意が調っている。石井はいくらか緊張している様子だった。

「どうも、お招き頂き恐縮です」

石井頭取はよく磨きのきいた食卓に両手を乗せ慇懃いんぎんにいった。改まった石井のいい方に、鎌谷は照れ笑いを浮かべ、銚子を取り上げ石井の盃を満たした。二人



は当りさわりのない世間話に花を咲かせた。こういう場面での鎌谷は実に洒脱だった。場持ちが巧みだった。鎌谷は導引術なる健康法の猥雑な事例をあげ、その効果を強調したりした。

石井頭取はどちらかといえば、寡黙な性格である。だが、鎌谷の巧みな話術に引き込まれ、表情を崩して笑った。こういうときこそ用心しなければ、と石井は思うのである。それにしてもこういう形で、座を待つこと自体が珍しいことであった。石井は用心深く、探るように今日の要件がなんであるかをそれとなく聞いた。

「頭取は小川という人物を知っておいでだったね」

「小川といえばメキシコでいぶ世話になった、あの小川君ですか」

「そう、あの小川君だが、二日ほど前に突然私を訪ねてきてね、いきなりだ。鋼管を輸出してほしい、五十億ドルの借しゅっかん款がほしいといってきた。鋼管輸出の話は日管製鉄につないでおいたが、借款の話はあまりにも巨額であること、相手がメキシコとあってはね。ともかく話を聞いておくだけにした」

「そうでしたか、五十億ドルとは大きいですね。あそこは外貨繰りに困っていると聞いてはいましたが、それでも当面決済に必要な金額はせいぜい二十億ドル前後だと思えます。で、それを何に使うというんです」

「実をいうとそのあたりがはつきりしない。ただ、わかっていることはこの話の裏にカルロスがいること、それにどうやエネルギー問題が絡んでいることだ。僕の直感だが、これは石油だと思う。そうだとすれば、簡単に断るわけにもいかないのではないかね」

かつてはボトル一本は軽く空けた鎌谷だが、医者に止められているとあって酒は控え目だった。当然だろう。すでに八十を超えた老人である。そう量が多い酒ではないが、老人特有の柔らかい肌を真赤に染め上げていた。が、決して酔っているわけではなさそうだ。

「石油ですか。しかし、会長。あそこはメジャーさえも引き揚げた。確か四、五年前でしたね、あれは実をいいますと私どもにとりまして、かなりの打撃だったんです。馬鹿なもので、つぎこんでしまった」

石井頭取の態度は明らかに拒絶的だった。ことメキシコに関して、石井が拒絶的になるのも無理がなかった。石井頭取にとって、メキシコの例の案件は失点だ

った。それは頭取としての石井にしてみれば、進退問題にかかわる大失策であった。が、責任を追及されずに済んだのは、周到的株主対策が功を奏したからであったが、他のプロジェクト金融がうまく動き出したことなど、まさに幸運としかいいようがなかった。メキシコに関わるのはこりこりだ とは、石井の偽らざる正直な気持ちである。

思い起こしてみれば、千代田銀行がプラント輸出金融など、いわゆるプロジェクト・ファイナンスの分野に傾斜を強めていったのは、ちょうど今から十五年ほど前のことだった。行内でその先陣に立ったのが、当時副頭取の石井だった。その最初の舞台となったインドネシアでは、海外市場で常に競争関係にあった産業開発銀行と真向うからぶつかった。

産業開発銀行はインドネシア政財界に深く喰い込んでいる極東綿花と組んで石油や天然ガスの開発で順調に業績を上げていた。米銀を除けば、邦銀のなかで産業開発銀行がほぼインドネシアでの金融市場を独占する状態にあった。貿易金融では屈指の実力を誇る千代田銀行にしてみれば、これは屈辱的であった。なんとしてもプロジェクト・ファイナンスの分野に喰い込まなければならぬ。

それは千代田銀行にとつての悲願でもあった。このころから千代田銀行はプロジェクト・ファイナンスの世界にかなり強引な攻勢に出ていくことになる。インドネシアの天然ガス開発プロジェクト向けファイナンスでは、大蔵省と通産省が調停に入り、結局は救済の形で決着をみた。後発組の千代田が産業開発銀行と並んで金融団に参加することができたのは、なんといつても石井の政治力に負うところが大きかった。

続いて、中東のオーマン精油所建設に絡んだ国際金融コンソーシアムの組成では金融コンサルタントとして主導権を握っていた米銀のシスム・バンクが積極的にバックアップしてくれたこともあって、どうにか幹事団に椅子をしめた。

オーマン中央銀行向けに調達した金額は、七億八千万ドルとかなりの規模の融資額だったが、ここでも千代田銀行は先陣を切って走る石井のもとでどうにか幹事銀行にふさわしいシェアを占めた。マジヨリテイを把握したわけではなかったが、それでも幹事銀行の一員として、調印式に齢んだあのとこのことを石井は今でも誇りに思っている。

メキシコ向けに三千億円の混合借款の話がもち上がったのは、ちょうどオーマ

ン拘け金融組成が成立したばかりのところだった。用途を限定しないで、産業育成と工業開発のためにこの借款を利用する。それがメキシコ側の申し入れで、その見返りとしてメキシコ原油の対日供給が用意されていた。

石井はこの話に小踊りして飛びついた。が、この場面でも産業開発銀行と激しくぶつかり合った。当時、マスコミは千代田・産銀戦争とはやしたてたものだった。スキヤンダラスな怪文書が流れたこともある。

石井の狙いは端的にいつて当面の損得勘定よりも主幹事の座を確保することだった。メキシコではなんとしても、マジヨリティを握り、主幹事として調印式に臨みたい。石井は当時、副頭取から頭取に就任したばかりだった。それだけに彼を激しく燃え立たせた。

話がもめた原因の一つは、石油がらみの案件であったことに加え、産業開発銀行が関係業界を巻き込んで、借款問題を財界ペースに乗せることで、巻き返しを図ったためである。

つまり、この借款をナショナルプロジェクトとして推進することを、産業開発銀行側が強硬に主張したためだった。千代田側は経過論を主張した。一部、政治借款が含まれる以上は、産業開発銀行の主張の方が説得力があった。産業開発銀行の福元頭取はなかなかの切れ者だった。

借款は石油の引き取りと一体になっている、だから石油引き取りのために官民共同出資による第三セクターを設立して、この新会社を通じて借款を供与すべきだと産銀は食い下がってきた。メキシコ側もしたたかなものでこうした日本側の内部対立を巧みに利用する形で、さらに条件を釣り上げてきたりした。

それにプラントの受注を巡って、新たな問題が噴出した。メキシコではいくつかの工業案件が検討されていたが、どのプロジェクトを優先するかで、もめ始めたのである。コミットの度合いによって、各グループの主張はまちまちだった。利害関係があまりにも錯綜していたため調整のしようがない。

結局のところ調整は日経連の田登経済委員会に持ち込まれ、鎌谷会長が調整に乗り出した。当事者間の話し合いが不調に終わり、水面下の闘いが一気に吹き出したためだった。こうしたなかで石井は日墨経済会議が組織した訪墨ミッションに加わり何度かメキシコを訪問した。小川を知ったのもその折りのことだった。

「石井頭取、いかがなものでしょうか。三千億円の借款とは別途に、ピカルシア

製鉄計画向けに、千代田銀行単独の融資をお願いできないだろうか」

ダ川明夫の紹介で接見に応じたカルロス前大統領が、そう切り出したときはさすがの石井も啞然としたものだった。直談判の形でカルロスが要請した金額は一千五百万ドル程度で、期間もこの種の案件としては比較的短いものだった。

これで話が有利に進められるのだったらそれはどのリスクではない

そのときの判断だった。頭取自身がこうした話に直接コミットすることは確かに異例なことには違いないが、石井はその場で承諾した。それにしてもカルロス自身が直接乗り出してくるとは、数多くの修羅場をくぐり抜けてきているはずの石井にとっても、これは初めての経験である。実際、驚いたものだった。

だが、三千億円の混合借款の決着は、玉虫色だった。経済協力基金や日本輸出入銀行などの政府資金が入り、さらに石油輸入ということ、石油開発公社も出資に応ずることになった。民間のシンジケート・ローンは千代田銀行、産業開発銀行などに加え、市中銀行二十一行も参加した。

最終的な合意が成立したのは確か、八三年だった。石井の思惑からすれば確かに満点ではない。が、あるとき、鎌谷会長がいったように、千代田銀行は名を捨て実を取った。いずれにせよ、千代田銀行はメキシコで確固たる地盤を確立したのである。それはそれで満足すべき成果だった、と石井は鎌谷の顔を見ながらあ那时的ことを思った。

それにしても小川が持ち込んだ話にどう対応するかは鎌谷がいう通り、確かに微妙であると石井は思った。が、やはり現実の問題は千代田銀行にとっては、メキシコは明らかに経営上厄介な荷物になっていることだった。簡単には応ずることはできない、と思った。

混合借款が実現したことでメキシコブームは加熱化し、それに伴って千代田銀行の対メキシコ融資も急速に膨らんでいった。自動車生産計画、製鉄所建設計画、肥料工場建設、石油化学計画、火力発電計画といった工業開発プロジェクトに千代田銀行は次つぎとコミットを深めていったからだ。石井の思惑通りメキシコでの事業は大きく進展したのである。

ところが、事態は急変した。米系メジャーの撤退、石油生産が大きく後退し、それまで順調に進んでいた工業化計画が挫折を余儀なくされたのだ。それにアメリカとの関係が険悪となったため、米銀も対メキシコ融資には債重な態度を取り

始めていた。千代田銀行の対メキシコ貸付が急に膨らみ出したのは、考えてみればこのころであった。読みが浅かったのだ。

千代田銀行は短期長期を合わせて、メキシコには十五億ドル前後の債権を持っていた。そのうち六割がメキシコに進出している邦人企業向けの融資だが、そのほかメヒペトロに対する直接融資やピカルツア向けの融資は、経済情勢が悪化してきたために債権回収に不安が起こっているのだ。最高責任者としての石井が深刻になるのは当然だった。

メキシコ・シティで開かれた債権国会議でメキシコ政府が元本返済の繰り延べと八六年中に必要とする金利相当分の新たな資金協力を求めてきた。金融エキスパート会議に出席した田所国際企画部長の帰国報告を受けたとき、石井は背筋に冷たいものが走ったのを覚えている。ついにメキシコの金融危機は表面化したのだ。

石井は追いつめられた思いだった。一カ国で十五億ドルとは大きい。それがまるまる焦げつくようなことでもなれば、石井自身の責任問題に発展することは避けられまい。石井の独断専行が原因で、これだけの不良債権を抱え込むことになったからだ。

それにもう一つ不安なことは米銀の動きである。米銀は、例の金融エキスパート会議でも、元本繰り延べに同意する見返りとして、第三国の保証状の提出をメキシコに要求した。これはメキシコの要請を事実上、拒否するものである。会議ではこの保証状の問題とリファイナンスが焦点となった。

リファイナンス問題は、遅延しはじめた利払いにどのように対応するかで問題となったのだが、金利相当額の新規融資には第三国の保証状がなければ、応諾できないと米銀が主張したのである。米銀は終始、強硬な姿勢を崩さなかったためエキスパート会議は荒れに荒れた。千代田銀行を含め、ほとんどの邦銀代表はこのやり取りを、ただ、おろおろと見守っているだけだった。

その後、三月に聞かれた債権国会議も不調に終わった。債務返済計画をメキシコ側が明確にしなかったことも、会議が混乱した原因の一つだが、それだけではなかった。石井もこの成り行きに不安を覚えていたため、情報収集に懸命だった。

が、予想されていたこととはいえ、米国がやはり第三国の保証状問題に固執したため、結局、会議は次回の債権国会議を七月一日に開催することを決めただけ

で、なんの成果を上げることができずに終わった。石井にとって衝撃的だったのは、その会議の舞台裏では米銀が持つ債権を日本に押しつけてきたことだった。米銀は逃げに出ていた。こんな時期に新たに五十億ドルもの借款に応ずるということは正に氣違い沙汰だ、と石井は思った。

「来週からワシントンで、債権国会議が再開されることは、会長、ご存知ですね。大蔵省は政府間ベースの元本繰り延べに、同意する意向を表明することを決めたようですが、問題は民間ベースの話です。要するに米銀は日本に債権の肩代りを求めてきているのですが、今回の場合にもやはりリファイナンスを要求しているようです」

石井はさも迷惑そうに渋面をつくっていった。実際、五十億ドルどころの話ではない、石井はそういいたかった。ことごとく否定的な材料を並べたてる石井の前に、鎌谷の表情はそれにしても明るなものだった。石井の話にいちいち頷き、微笑を絶やさなればかりか、なかば同調的にこの悲観的な話に問いかけていた。「いや、おたくの場合はメキシコでだいぶ苦勞をしている。それは理解しているつもりだ。この問題では僕も責任を負わなければならない立場にあることはじゅう承知している」

「そういうつもりで申し上げたわけではありませんが、このメキシコ問題ではだいぶ追い詰められているので、つい愚痴になりました。ところで会長、石油の話ですが、確実なんでしょうね」

「小川君の話では確実なような気がするんだが、僕としても確証を握っているわけではない。ただね、例のメジャーの撤退のことだが、あれは不自然だった。あの撤退の仕方は技術的にどうのこうのというよりは、あれは明らかに政治的な行動だったと僕は思う。第一、石油開発公社にしても技術資料はほとんど提供されていないようだしね」

「そうするとなんですか、メジャーは油田を隠したままメキシコから撤退したということですか。どうも信じられませんね。いくら狡猾な彼らでも、そこまでやるとは考え過ぎでしょう」

石井はかなり皮肉ないい方をした。刺のあるいい方である。が、鎌谷はそのことを一向に気にしていない様子だった。あっけらかんとしたいい方で、そうかもしれないね、といって話題を転じた。

「第一だ、世間がいうほど石油情勢は楽観できないと僕は考えている。今は供給過剰だというが、中東は不安定だ。いつ火が噴いてもおかしくない。そうだとすれば供給ソースをできるだけ、多元化しておくこと、これは国益からいっても重要なことだ。石油があるというのならばおもしろいじゃないかね、これはやってみる価値があると思うんだが」

一般論としていえば、鎌谷のいう通りだと石井は思う。第二次石油ショック直後の狂乱暴騰としかいいようのない石油価格の高騰が鎮静すると、今度はその反動として石油価格は急速に下落した。が、なぜか昨年十二月に入って以降、石油価格は再び上昇に転じていた。

石井が購読しているコンフィデンシャル情報誌は、その理由を イランシーア派過激グループのサウジアラビアに対する不穏な動きにある と書いていたの思い出した。とくに湾岸諸国では政治的な動揺がおこっているとも伝えられている。それにサウジアラビアではサウド王家の内紛説が伝えられるなど決して楽観できるような情勢にはなかった。

それにもかかわらず日本は石油供給ソースでいえば、中東に六十五パーセントも依存しているのだ。中国の渤海湾から石油供給が始まったとはいっても、それはわずかな量にしかすぎない。

他方、インドネシアの原油生産はピーク時をすぎて、輸出余力は大きく後退している。省エネルギー政策が順調に進み、確かに消費量はかつてに比べ、三割程度は縮小されている。が、本質的にいえば日本の子不ルギーの消費と供給の構造は、あの七〇年代と少しも変わっていない。

だから鎌谷のいうことは理解できる。日本の経済安全保障を確保するためにはできるだけエネルギーの供給ソースを多元化しておいたほうがよいのは決まってきたことだ。当り前の話である。

だが、そのこととこの話は別問題だ

口には出さなかったが、石井はそう思った。仮に石油があつたとしても、たぶん米国との調整が必要になる。米国は明確にはいわないだろうが、日本がメキシコにコミットを深めることには、反対するだろう。相手はディフォルト寸前のメキシコである。リスクが大き過ぎはしないか。そう考えると、石井としてはやはり慎重にならざるを得なかった。

「この話は私どもが伺うにとしては荷が重いようです。会長、この話は日経連の日墨経済委員会あたりで検討するのが適当と思うのですが、どんなものでしょうかね」

石井は肩を縮めるようにして、生真面目な調子でいった。それは逃げの姿勢だった。少なくとも、鎌谷はこの問題をどこで議論すべきかを石井に問いたわけではない。曖昧というよりは、問題のすり替えだった。

「なるほどそれは名案だ。あなたもやはり公式な場でこの問題を取り上げるべきだという意見ですか。ありがとう、あなたが賛成してくれたので、助かった。それではご苦勞をかけることになるが、次の常任委員会でああなたのほうからこの問題を日墨経済委員会に提案してはくれまいか」

鎌谷の態度は屈託がない。さも安心しきったような表情をつくっていった。

これまたすごいきいた話のすり替えだ。

しまった。話の罫にはまり込んだ

とは思ったのだが、遅かった。これで出口をふさがれてしまった。しかも石井はいつの間にか、対メキシコ借款を推進する一人に仕立て上げられた形となっていた。そうなれば、千代田銀行としては逃げようにも逃げる事ができなくなる。

「いや、私には荷が重過ぎます。誰か適当な人にと思っているのですが」

さらに抵抗を試みたが、無駄な努力だった。

「せっかくのあなたのご意見だ。考えてみればやはりあなたが適任と思うがね。それに今回は、対メキシコ借款の可能性を検討するだけの話だから、そんなにきばって考えることもないと思う。気楽にやりましょうよ」

それで決まったというように、やおら鎌谷は柏手をひときわ大きく打った。着飾った芸者たちが、滑るように入ってきた。鎌谷は馴染みの芸者をからい始め、とても議論するような場面ではなくなった。こうなれば抗弁したとて、相手にされるわけではない。石井は恨みがましい思いで、盃を重ねた。

(つづく)

小説国際プラント・ビジネス戦争（五）

杉田望

友との再会

山元竜夫やまもと たつおが勤める日東経済研究所は、いわゆる世間的にも名の知れたシンクタンクだったが、そうは言っても中に一步入れば、サラリーマンの集合に過ぎない。こゝもまた、サラリーマン社会の法則が厳格に適用される世界だった。だが、山元はこの研究所にあってはちょっと変わった存在だった。要するに山元はサラリーマン社会に馴染み難かったのである。



いつのまにか、山元に対しては 頑固で融通がきかぬ奴 という確固とした評価が定着していた。そういう評価が定着することはサラリーマンにとって致命的なことだが、山元はそう評価されることに不満を感じたこともないし、実をいうと気楽なことだと考えてすらいる。が、まわりの人間からみれば山元は明らかにうだつの上がらぬ研究者にみえた。

山元がうだつが上がらないのは、彼が研究者として無能だからということではなかった。それはあのときの事件を契機とするものだった。事件というのは日東経済研究所が、外務省の委託として引き受けたある調査を巡って、この研究所の所長の児島卓也こじま たくやと激しく対立したことが原因だった。所長の児島も山元に負けず劣らずの頑固者だった。

お互いの立場を考えれば、結論はわかっていた。だいたいが児島と対等に議論しようということ自体が不遜ふそんである。この職場では児島は、絶対的な権力を握っていた。勝敗は最初からわかりきっていたのだが、山元は立場もわきまえず頑固に抵抗した。それが児島を激怒させた。

山元の研究所は外務省から「中国経済の成長に関する研究」と題する研究調査を引き受けた。山元はそのチーム・リーダーだった。折から日本は中国フイーバ―の真只中にあつた。当然、日中の経済関係に關しても樂觀論が支配的であつたし、経済界も経済開放政策を大胆に進める中国をもる手を上げて歓迎した。それに中国のエネルギー資源も経済界にとつては魅力的だつた。

が、山元の判断は違つていた。確かに中国では極左路線が打ち倒されたことで対外政策は従前に増して柔軟になつたことも事実だし、なによりも米国との關係が大きく改善されたことが國際的にも評価されていた。西側資本を直接導入する姿勢を見せたことも、こうした路線の転換が本物であることを印象づけた。それに中国をアメリカの 準同盟国 と位置づける評論家まで現れる始末だつた。

が、山元が問題としたのはそうした皮相的なことではない。彼の研究チームは膨大なデータを駆使して、新中国誕生以来三十年におよぶ政治と經濟の分析にあつた。山元の研究チームが集めたデータは 山元コレクション と所内では呼ばれるほど豊富で貴重な資料を集めた。そこでの結論は……。

四人組が打ち倒されたとはいつても極左の影響が強く残っており、政治情勢がまだ安定をみていないこと、さらに資源の開發の面ではそれほど過大な期待を抱くことはかえつて危険であること、この間に大量に外国から資本財を輸入しているが、これが外貨事情を圧迫していることなど、いわゆる多数派の意見をことごとく否定する内容だつた。

要するに山元たちのチームが書いた調査報告書は世間の評価とは裏腹に中国に対してはまことに厳しい内容の報告であつた。結論をいえば 中国は危ない というものだつた。だから西側から大量に買いつけを予定しているプラントも、場合によつては建設が不可能になる恐れもあると警告していた。

だが、困つたことに外務省は樂觀論の報告を要求していた。だからこの報告書は調査委託主の意向を完全に無視することになるわけで、そうした内容の報告書がすんなりと通るはずがないことは山元も充分に承知していた。が、逆にいえば、だからこそシンクタンクの良心として、分析結果を正確に委託主に対して伝えるべきだと山元は考えた。

「それは甘い考えだ」

直屬上司である根本良三は、渋い顔をつくつていつた。根本はまず結論部分の

訂正を求めた。根本は証券会社の営業マンあがり、研究所では常務の職責にあったが、ほとんど児島所長のイエスマンで通っていた。頑強に持論を譲らない山元に対して、根本は情実を絡ませて説得にあたった。だから山元とは議論が噛み合うはずはない。山元のスタッフたちも、山元を支持した。結局、所長の児島が乗り出してきた。

「山元君どうだろう。この問題に関していえば、楽観論があることも事実だ。実は僕自身が君が否定的にいう楽観論者でね。結論全体を変えろとはいわないが、結論は両論併記としたい」

児島はあくまで穏やかだった。口元には微笑すら浮かべていた。が、さすがというべきだ。児島は昔に、満鉄調査部で鍛え上げてきただけあって論理的な攻め方で迫った。しかし、なにやらバーゲン・セール風のもの言い方が、山元には気に入らなかった

とくに問題になったのは石油埋蔵量の評価であった。石油開発の可能性が正面から否定されることになれば、日本が中国にコミットする意味がなくなる。政府は石油開発を対象として巨額な投資計画を練っている最中にあっただけに、日東経済研究所がどのような報告を出すのか、関係者も注目していた。

「勃海湾の石油埋蔵は確かにかなりの規模です。しかし、地質は断層構造でして、原油はその断層に点在する形で埋蔵されている。ですから油層はいずれも小規模なもので、それだけに開発コストは高くつくことになります」

それは山元たちが詳細にデータを検討した上での結論であった。だから大規模な開発投資は慎重にすべきだ、と報告書には書いてあった。が、児島はなによりも政治的なことを配慮しなければならぬと考えているようだった。残念ながら児島との議論は平行線だった。

「これが最後の提案だが、最大限に譲歩したとしても両論併記だ。第一だね、君の意見に同意することは、現在、順調に進んでいる日中の経済関係に水をさすことになる」

すでに友好的とは言えない雰囲気になっていた。議論は最終局面を迎えていたのである。いいかげんに譲ったかどうかと、忠告するものもあった。が、山元は頑として応じない。生来の頑固者だと、山元自身が思うのだが、自分をコントロールできないのだ。

その翌日、根本が調査チームを解散すると通告してきた。山元にとっても十分予想されたことだったが、やはりショックだった。中国プロジェクトチームは新たに児島所長のもとに編成し直され、山元たちが収集した資料とデータを引き継ぎ、結論だけを変えろという奇妙な作業が始まった。山元チームの幾人かもこの作業に参加した。が、山元の態度は周囲が心配するほど、深刻ではなかった。意外にも冷静そのものだった。

それから一週間後の午後。児島所長が山元を呼び出した。山元はそのときのことを昨日のことにように思い出す。児島の机のそばに、いかにもぼつが悪いという表情で根本が立っていた。

「君には今後、海外資料整理の仕事をやらせてもらうことになった」

無表情にそういっただけで、児島は何事もなかったかのように、机にある書類に目を落とした。そのいい方には 転職の準備でもしたらどうか といった意地の悪い響きがあった。根本は何か弁解めいたことを言っているようだったが、山元の耳には入らなかった。その日のうちに山元の席替えが行われ、新しい席は資料室の隣に決まった。あのと時から十年近く山元の席は動いていない。

山元の机は資料棚に囲まれているので、独立した部屋のような雰囲気があることは確かだが、

まがりなりにも主任研究員として独立した部屋を宛がわれていたことを考えれば、意図的な格下げであることを感じないわけにはいかない。それ以後山元に回ってくる仕事といえば、外国雑誌の整理だけだった。

結果からいえばこの論争は、山元たちの主張が正しかった。その二年後には中国では、政争含みの経済調整が始まり、山元が予想したように大量に買いつけたプラントのキャンセル事件が発生した。が、こういう場合はその結果がどうであれ、上司に盾ついた頑迷な男だということしか、評価は残らない。サラリーマン社会とはそうしたものである。状況がどのように変わろうと、山元の仕事は相変わらず資料の整理だった。

今日もまもなく単調な作業は終わるはずだ。時計はすでに午後四時半を指していた。海外から郵送される新聞、雑誌を丹念に整理し、内容をクリッピングしてカードに書き込むのが日常的な仕事だ。そのカードはその場でコンピュータにインプットされる。たった一人の仕事だが、作業は要領よく進められ、作業机に山

積みされた新聞、雑誌はあらかたかたづけられていた。明日も同じような作業が繰り返されるはずだ。

「今日は早めに切り上げようか」

作業の手を休めて、山元は呟いた。あの事件があつて以来、外部から電話がかつてくることは珍しいことになった。同僚の幾人かは、マスコミの舞台で猛烈な論陣を張り、活躍していた。国際通貨、エネルギー問題、軍事防衛問題、中東問題、また米ソ関係が緊張することになれば、東西問題と、何にでも飛びつき、にわか専門家に变身するものもあつた。

マスコミの世界で、寵児扱いを受ける同僚も何人かいた。所長の児島自身がマスコミの世界で、一種のスターだった。それは日東証券が意図的に、研究所の職員を積極的に売り込んだ成果でもある。要するに権威づけの目的で、マスコミを利用したのである。

当然のことだが、だれでもその機会に恵まれるということではない。児島の眼鏡にかなう茶坊主だけが、その機会を独占していた。あの事件以来、山元にはそうした華々しい舞台は決してまわってこない。だから外部からの電話もめつきり少なくなつた。

その山元の卓上の電話が珍しく軽い金属音をたてて呼んでいる。

「山元か、俺だよ、小川だ」

電話の声はそう呼んだ。懐かしい声だ。電話の主はまぎれもなく小川明夫だった。山元はおうっと、息をのんだ。思いがけない相手である。

「今、どこにいる。日本にきているのか」

山元はやや性急に聞き返した。小川の声を聞くのは五年ぶりのことだ。確か五年前には、アンジェトロ大統領の随員として、日本に帰ってきた。多忙な日程をさいて、都内のホテルで二人は会った。あのとき以来だ。

「日経連に少し用事があつてね、それを済ませたところだ。出られるか」

「もちろん大丈夫だ。そう、三十分後に丸ノ内ホテルにしようか」

日東経済研究所は日本橋の証券街のなかにある。数年前に建て替えられた証券会館の裏手に面して、いわば日本のウォールストリートとでもいうべき証券街のど真中にあつた。

丸ノ内ホテルは、呉服橋の交差点から大手門に向かって国電のガードをくぐり

信号を渡った左手にある。歩いて五十分足らずの距離である。

まだ、小川の姿はなかった。山元はコーヒーでもすすりながら待つことにした。ほの暗いコーヒーハウスである。時間が時間だけにやや混雑していた。席をみつけ腰を降ろすと、メニューを片手に掲げたウェーターが近づいてきた。

「ご注文は決まりましたか」

「ブラックを頼む」

山元は短くいった。軽く会釈してウェーターは立ち去った。客たちの和やかな談笑を耳にしながら、山元はせわしげにコーヒーを口に運んだ。新聞に目を通している山元の肩を軽くたたいたのは小川だった。よく日焼けした童顔からにっこりと白い歯がこぼれた。

「待たせたかな、時間が十分あると思って、大手門から皇居の方に出てみたのだが、このあたりはずいぶん変わったね」

そういいながら、山元の正面の席に腰を下ろした。こうして向かい合うと昔のこと、学生時代のことか思い出される。山元は秋田の出身だが、宮城出身の小川とは同じ東北の出であるということもあって、大学では入学早々から親交を深めた。けれども二人を決定的に結びつけることになったのは、入学早々に始まった学生会館の建設を巡る学園紛争だった。二人とも政治的な党派は嫌いだだったが、ある種の正義感が二人を闘争に駆り立てた。

小川は活動的で、目立つタイプだった。それに東北の人間にしてはスマートである。山元といえば、白熱する議論にも参加せず、こつこつとガリを切るような学生だった。二人の性格はまるで対照的だった。だから気が合うんじゃないかと学友の一人が、二人を評したことがあった。山元は たぶんそうかも知れないと思うことがある。

学生運動が最盛期を迎えたとき、バリケードのなかに最後まで残り、あっさりと逮捕されたのは山元の方だった。大学四年の夏休みも過ぎ、そろそろ就職の準備を始める時期だった。

「レポートを出せば、卒業に必要な単位をやるう」

そう言った主任教授の温情にすがって、ともかくも山元は卒業した。が、小川を選択は違っていた。そのころ学生運動はいよいよ街頭闘争の色彩を一段と強め、どちらかといえば学生たちに同情的であった世間やマスコミまでが批判の側に

まわっていた。とくに衝撃だったのは、浅間山荘事件だった。悲惨な内ゲバ事件が相次いでおこった。狂気が支配した。さすがの小川も陰惨を極める内ゲバにはついていけないといった。

「日本には夢がなくなった。中南米で自分のことを考えてみたい」

小川が海外に出る決意を打ち明けたのは、卒業間際のことだった。山元は黙って小川の話聞いた。伯父の手づるをたよって、日東証券に就職が決まっていた山元にすれば、贅沢ぜいたくでうらやましい選択のように聞こえた。国電・高田馬場の裏手にあった「呑気」という飲屋で、したたかに飲みかつ酔った。それが二人の惜別の宴でもあった。

その後、二人が再会するのは十年後のことである。そのとき、小川はジェーナを伴って現れた。ジェーナを自分の妻だといって、山元に紹介した。抜けるような白い肌と、黒い瞳が印象的で、山元にはジェーナがまぶしく映った。小川はサカテカス大学で助教授を務めているといった。たぶんあの頃が小川にとっては得意の絶頂だったはずだ。

「山元さんですか、あなたのことは、小川から、毎日のように聞かされていたので、初めてお会いするような気がしませんわ」

たどたどしくはあるが、ジェーナは明瞭な日本語でいった。快活で実に聡明そうだ。脚はすらりと伸び、握手を交かわした手の指は柳のように細くしなやかだったことが印象に残った。

そのときの山元といえば、どこかうらぶれた感じもなかった。すでに三十半ばだというのに独身。それに児島所長と例の調査報告書をめぐって対立、その拳あぐく句、閑職に追われた身だった。山元はそうした自分の置かれている境遇をまるで、他人ごとのように話した。悪びれるところがないのがこの男の救いだ、とあのときの山元のことを小川は思った。

「ところで、君はフィクサー稼業から足を洗ったはずではなかったかね。日経連に出入りしているところを見ると、学者稼業よりはそっちの方が、実入みいりがよいということかね」

小川は直接答えずに、

「久ぶりにどこかで飲みたい。ここではなんだから場所を移そうか」といった。

「そうだな、高田馬場の「呑気」は覚えているか。確かあそこの女将は元気でやっているはずだが」

二人はコーヒーハウスを出て、タクシーを拾った。昔のまま、「呑気」は駅の裏通りにあつた。今日は金曜日だというのに、意外に客は少なかった。二人でゆっくり飲むには好都合なのだが、それにしてもよく店が続いているものだ。飲代もそう高くない。あの頃の貧乏学生にとっては手頃な居酒屋だった。

「あなた、小川君ね、すっかり立派になられて、私ときたらこのとおりのおばあちゃんになっちゃって、でも本当に懐かしい。山元君、珍しい人を連れてきてもらって本当に感謝するわ」

居酒屋の女将はキヨといった。キヨは小川を抱きかかえるようにして店に招き入れた。あの頃のキヨは四十を少し過ぎたばかりだったから、今は六十少し前ということだろうか。和服がよく似合うのは昔と変わらない。

カウンターには二組の客がいた。キヨは二人を奥座敷に案内した。しばらく昔の話に花が咲いた。友人たちのその後の様子なども、話題に上った。屈託なく笑い、そして二人を掴まえて説教めいたことをいうのも、昔のキヨと少しも変わっていないと小川は思った。が、キヨは酒と肴の用意を調べると、ときを見計らうかのようにして席をはずした。

「相変わらず例の仕事をやらされているのか。まったく、日東というところは人の使い方を知らないところだ。それにしても、くさりもせずによく我慢しているもんだなあ、君は……」

「そういつて同情してくれるんだ、同僚たちがね。しかし、僕はそんなふうには考えていない。結構、仕事はおもしろいんだ。そうじゃなければ、いくら僕だつてやめているさ」

山元は気張っていつてるわけではなさそうだ。不遇な友人を慰めるつもりだったが、山元はそんな同情を必要とするような男ではないと考えると、嬉しい。

「たとえば……これもそうだ」

といって、山元は書類鞆を引き寄せ、台紙にファイルされた英字新聞のスクラップを引き出した。そのファイルは山元の個人用としてつくったものであるうか。スクラップの余白にはぎっしりとメモが書き込まれていた。

「一種の頭の体操と考えるてもらいたい。これはメキシコ沿岸でソ連の原子力潜水

艦が事故を起こしたという記事だ。ニュースとしての価値は高い。なぜかこのことは日本では報道されなかった。だけれが、このニュースを封じ込めた、というのが僕の推理だ、どうかね」

目の前に示された記事を見て、小川は一瞬息をのんだ。ずば抜けた想像力だと小川は改めて感心した。研究所のなかでは完全に孤立している山元は、これといった話し相手もないのか、久しぶりに、その話し相手をみつけたかのように熱心に話し始めた。

「こういふ記事からいろいろなことがわかるんだ」

と、山元はネクタイを緩め、あぐらを組み直した。学生の頃と少しも変わっていない。もう少し要領がよければと、小川は思うのだが、それが山元の良さでもあると考えた。

「この場所、つまりソ連の原子力潜水艦が事故を起こしたところだが、このあたりはかつてエプソンズとかモビルスとか、アメリカの石油メジャーが石油開発を進めていた海域だった。が、メキシコとアメリカの関係が悪くなり、米国系の石油メジャーは、一斉にメキシコから引き揚げたことは、君も承知の通りだ」

「確かそうだったと思う」

小川は曖昧に答えた。次に出る山元の言葉が恐ろしくさえ思えた。

「そう、これは君の専門領域の話になるが、米墨関係は最悪だね。アメリカは対メキシコ制裁として、金融封鎖に近いことまでやっている。これだけやられれば、たいていは音をあげるものだ。が、メキシコはそうではない。あくまで抵抗する構えだ。ここらあたりで適当に妥協することも考えてもよさそうだが、それをやるような気配はまるでないね。そこでだ、その理由を考えてみたのだ。たぶんこれには何かあるはずだと思ってるね」

「なかなか興味深い話だ。で、その理由というのは……？」

「そこが肝心なんだ。その理由、つまりソ連の原潜事故と結びつけてみたのだが、これだとすっきり説明ができるんだね。この事故の調査過程で、メキシコ政府はメジャーの隠し油田を発見した。どの程度の規模の油田かは別にしてもエネルギー資源があるとなれば、事情は変わる。金を貸してくれるものが現れるかもしれない。そういう仮説をたてると、アンジエト口政権が対米強硬路線をとる理由も理解できるような気がする。多少、話が飛躍してしまうのは手元の材料が不足し

「てるため、それは勘弁願いたい」

原油生産が過剰気味であるとはいっても、中近東の情勢は不安定だ。どのような事件が起こったとしてもおかしくはなかった。その意味でやはり原油は金の卵を生む鶏だった。一枚の新聞のスクラップから想像力を膨らませる。山元の話す態度はあくまで知的な推理を楽しんでいるようだ。

「で、もうひとつだが、つまりそれは君のことに関わる問題だ。この膨大なエネルギー資源をどうやって開発するかだ。メキシコには資金がない。そこで君の登場ということになる。今回、君が日本にきた目的、それは開発資金の調達にある、と、考えればこの話はさらにもろくなるのではないか。君の電話を受けたとき、ふっとそう思った」

「ううむ……」

山元の話が一段落したとき、小川は思わず唖った。小川は幼児が大事に隠し持っている玩具を、台無しにされたときに味わうような気分になった。山元は冷えた酒をコップに移し替え、一気におおった。原潜事故と石油を結びつける、確かに突飛で大胆な推理だ。材料といえ、たった一枚のスクラップに過ぎない。ディテールはともかくとして、大筋でいえば山元の分析は正しい。なんとという恐ろしい男だ。小川は感嘆した。

小川は酔いがまわるにつれて、この事件の経過と、自分が今からやろうとしていることを話してみたくなった。多少のためらいはあった。が、学生時代に慣れ親しんだ居酒屋で、友と酒を飲み交わしている気易さが、小川をそういう気分にしたとしかいいようがない。

「正直にいつて驚いた。君の推論はだいたいにおいて正しい。メキシコには確かにエネルギー資源が豊富に存在する。君が指摘したように、原潜事故が契機で我われはそれを発見した。発見したのは石油ではなく、天然ガスだった。埋蔵量はたぶん世界でも有数の規模になるはずだ。で、これをどうやって開発するかが課題だ」

小川がそう切り出したとき、山元は素頓狂な声を上げた。そして、まさかという表情をつくった。酒の肴のつもりの話が、このような形になるとは山元にも考えてもいないことだった。

やがて小川の話は核心に触れようとしていた。メキシコではアンジェト口政權

の後継者をめぐって、激しい政争が演じられていることは山元も知っていた。そのことは、現地メキシコ・シテイの新聞にも出ていた。論調は民族派に対して攻撃的であるように思えた。

「四年前になるが、アメリカはマリオネス派と組んでガス田隠しを図り、その上でメキシコから撤退した。これによって、彼らはカルロスの後を継いで大統領に就任したアンジェトロに打撃を与えるつもりだった」

「ガス田隠しか、古典的な手口だね」

山元は穏やかにいった。もとはといえば、メキシコの石油鉱区を外国に公開する政策を打ち出したのはカルロス政権時代のことであった。それ以前、つまり八〇年代の初め頃までは外国企業がメキシコで資源開発にあたることは、完全に禁止されていた。カルロス時代にメキシコ沿岸に限って、エプソンズ、モビルス、テキサスの三社に探査権を与えた。山元は新しいタバコの封を切りながら、当時のことを思い出していた。

「なるほど、メジャーの撤退がなぜか不自然だと思っていたのだが、そういうことだったのか。たぶん日本の石油開発公社にしても実態がどうなっているのか、ほとんど知らされていなかったのではないか」

「その通りだったと思う」

当然、メヒペトロは開発を継続すべく努力を払った。が、技術力に欠ける上に資金が続かなかった。なにしろメキシコ沿岸鉱区は水深三百メートルを超えた。メジャーが撤退したとあっては、おいそれとは手が出せないというのが、本当のところだった。

「あのソ連の原潜事故はまったくの偶然だった。原潜は地中から突出していたケイシングに接触して事故を起こした。海軍の調べだと、どうやらスクリーにケイシングが巻きついてしまったらしい」

通常だと、試験井を廃鉱にする場合は、ケイシングを地中で切断して、セメントリングの措置をとるのが一般的だ。ところが、どうしたわけか試験井からケイシングが数本、地中から突出する形で残されていたのだと小川はいった。これは大変珍しいケースであると、山元は思った。

「試みに突出していたケイシングの何本かに、圧力テストを行ってみた。驚いたことにかんがりの圧力を示し、さらにテストを継続すると、どうやら石油ではなく

天然ガスが相当規模存在することがわかったのだ」

「なるほど、それはかなり幸運なケースだ。僕は素人だが、一本や二本の出油テスト程度で埋蔵規模がわかるものかね」

「うん、だからメヒペトロに命じて、周辺で地震探査を実施した。これには海軍も協力した。ガス層は直径十数キロにわたって広がり、しかもその層の厚さは数百メートルにおよぶことがはつきりした。ガス層の下層には良質なコンデンセー
ト（天然ガソリン）が存在することもわかった」

「ところで、なぜこのことが『ポスト・オブ・メキシコ』に流れることになったんだ。僕に有力な手掛かりを与えてくれたこの記事のことだがね」

「確かなことはわかっていないが、米国連邦情報局のキャリイだと思う。メキシコとの関係としてではなく、ソ連はついに中南米にまで手を伸ばしつつある、ということを政治的に宣伝する目的で、最初はリークしたものと考えている。後になつて、情報を抑えたのはガス田の政治的意味がわかったからではないか」

小川の話はそこで途切れた。日焼けした顔には、うつすらと脂汗がにじんでいた。が、顔には酔いの表情はまるでない。カウンターで、後かたづけをする音が襖越しに聞こえる。

先ほど、カウンターで飲んでいた二組みの客はすでに帰ったのだろう。山元はさらに新しいタバコの封を聞いた。部屋はもうもうたる煙に包まれていたが、二人は別だん気にしているふうもなかった。小川は改まった調子で言葉を続けた。

「幸いというか、我われが天然ガスの存在に気が付いたことは、マリオネス派にも米国にも覚られていないようだ。ソ連も何かあることはうすうす気がついて
いるようだがあんな事故を引き起こしたとあっては、沈黙を守らざるを得まい」
だから事故のことは、秘匿された。記事にならなかったのはそのためだ、と小川はいった。小川はワイシャツの袖をまくり上げ、コップに酒を移して飲み始めていた。

「メキシコとて米国と事を構えることは避けたい。カルロスもいつかは関係を正常化すべきだと考えている。が、アメリカがマリオネス派と結び、政権転覆を画策している。内政干渉じやないか。ソ連も同じだが、大国の連中は我われのような弱小国家を力で屈伏させることができるものだと思っている。これは許せないことだ」

激しい語調で小川はいった。遠くからパトカーが悲しげな音をたてて近づきやがて去っていった。酔客のどよめき、外の雑踏の臭いがこの部屋にまで押し寄せてくる。六月末といえば、サラリーマンにとっては待望のボーナスの時期にあたる。しかも今日は週末の金曜。いやが上にも街は活気づいていた。

小川の話聞きながら山元は思った。戦後世界を支配していたイデオロギーを軸とした東西間対立という構図は終焉しゆうまんのときを迎えているのではあるまいか。八〇年代の前半に激化した米ソの軍拡競争は宇宙空間に職域を広げつつも、中小国家の台頭によって軌道修正を余儀なくされている。問題は新たに発生した南北関係の緊張であろう。偏在する富を均等化させることを明確に主張しつつ、南側からの攻勢が始まっているのだ。

「そのためには我われにはパワーが必要だ。パワーとは知恵であり、我われが今手にした資源である。この資源を自助努力で開発、経済の基礎を安定させることだと儀は考えている。とりあえずテイクオフを図るのに、日本の支援がほしいと考えて日本に來たのだが……」

山元は小川の話にゆっくりと頷いた。小川はすでにメキシカンになりきっている。と思った。それにしても日本の場合、と考え込んだ。時代は明らかに変わってきている。

資源を買い取り、懸命に働いて、それを加工して世界中に売る。その循環構造が崩れ始めていることは明らかだ。先進国の仲間からは憎悪の目で、南の国からは羨望の目で。繁栄の孤島……山元の脳裏にそんな言葉が浮かんだ。

「たぶん、このことにはアメリカもマリオネスたちもやがて気がつくはずだ。資金と技術が欲しい。それに時間のゆとりが必要だ。少なくとも、我われ自身の手で開発に目途をつけるまでの間、ほんのわずかだが、時間が欲しい。彼らが妨害に出る前に計画を軌道に乗せたい」

小川の独りごちのような言葉を聞きながら、学生の頃も同じだったと思った。何にしても情熱をぶつけられる対象があることはいいことだ。そうしたものを大部分の日本人が忘れさっている。この男はそうした情熱をいまだに失っていない、羨ましいことだとも思った。

そのとき、座敷の襖が静かに開き、笑みをたたえたキヨが姿を現した。キヨはかなりオーバーな言い方で「おお、目が痛い」といって、窓を開け放った。ビル

のあいまから聞かれた夜空にネオンの照り返しが揺らいでいた。外気は湿度を帯び、ぐつと蒸していた。

「そろそろお開きにしようか。しばらく東京に滞在する予定なので、また寄せてもらいます」

小川がそういって立ち上がった。すでに板前も帰ってしまったらしい。キヨは出口まで二人を送った。小さく手を振っている。いつまでも振っていた。タクシ―は目白通りから外苑に抜け、赤坂に向かって走った。車は赤坂プリンスの前で止まった。

「今夜の話だが、内緒だよ」

小川はそういって、車を降りた。一度振り返り、高く手を挙げたかと思うと急ぎ足でロビーに消えていった。山元を乗せた車はなお、三田白金の方向に向かって走った。山元は 内緒だよ と真剣な表情でいった、小川の言葉を反復しながら、発展途上国が抱える問題の複雑さを考えた。

(つづく)

小説国際プラント・ビジネス戦争（六）

隠然たる実力者

杉田望

こんなところに住んでいると、とてもではないが最低一カ月に一度は山下りをしないと身体がもたない、と秋野が言った。なんといつても、ここメキシコ・シテイは標高二千三百メートルの高山都市である。それにやたらと自動車が増え、市内の大気汚染ときたら、それはひどい状況だった。なるほど、その通りだ、と今田は思った。

シテイから郊外に出るとあの白い埃っぽさはいくらか鎮まり、しばらくすると雪をいただくポカラル山が右手にあらわれる。松林の濃い緑のなかに南国特有の原色の花ばなが咲き乱れていた。別荘が木陰に点在し、観光客



のためのロッジが見え隠れしている。なかなか快適なドライブコースではないか。今田と木内を乗せたセダンはなだらかな下り坂をクエルナバカに向けて加速していた。

運がよかった。パテック社のレピカ社長とのアポイントはメキシコに到着して二日目にとれた。ラテン民族の気質からすれば、これは異例に近い速さだと秋野は言っていた。たぶんそうだろうと今田は思った。

レピカが約束の場所として指定してきたのが、二人を乗せたセダンが向かうクエルナバカだった。そこはスペイン統治時代から植民官僚や大金持ちの別荘地として知られ、避暑地としても有名だった。シテイからそこまでは約八十五キロ程

度の距離で、シティとの標高差は七百メートルだ。クエルナバカには植民地時代からの伝統を誇るアジエンダという格式の高いホテルがある。そこが今日、レピカ社長と約束した場所だ。

空気が薄いシティに比べれば、凌ぎやすい土地である。だからこのクエルナバカはシティ駐在の外国人や金持ちの多くが仕事の合間をみては休養のために出掛ける、そういう場所であった。約束の時間は午後三時三十分。二人を乗せた車はホテルの正面玄関にぴつたりと乗りつけた。大理石で外壁を固めた中世ヨーロッパ風のホテルだった。重厚さと威圧感を、ここを訪ねる人にあたえる。それはコロニヤ様式の一つの特徴でもある。

フロントでレピカ社長の所在を尋ねると、このホテルのマネージャーとおぼしき男が三階の十二号室だと答えた。客は少ない。ホテルの内部は閑散としていた。旧式のエレベーターは、大袈裟なきしみ声をあげながら、オープン式のドアを開いた。

木内が勢いよく十二号室のドアを叩いた。しばらくすると、ドアのノブが静かに動き、紳士然とした男が窺うようにして顔を覗かせた。

「関西商事の者です」

木内が英語で短くそう言うと、その男は大袈裟な身振りで歓迎の意を示し二人を部屋に招き入れた。そして、私がレピカだ、とこれも英語で名乗った。引き締まった身体にレピカはダークグレーの背広をぴしりと決めている。レピカはカルロス大統領のもとで、経済顧問を務めたエコノミストだと大園から聞いていた。知的な雰囲気漂わす男だった。

部屋のつくりは広い。その部屋の豪華なことにまず驚いた。たぶん、数世紀前の調度品だろう。それがバランスよく部屋に飾られ、時代を錯覚させるような華麗な雰囲気醸し出している。磨きのきいた大理石の床が、それをいっそう引き立たせていた。

部屋の中央にセットされた来客用の椅子から二人の男が立ち上がった。そのそ



ばには、ほっそりとした若い女性が立っていた。一人の男は六十半ばの老人だったが、どこか見覚えのある顔だった。シルバークレーの髪を品よく撫でつけ、威厳に満ちた態度で、その老人は二人に握手を求めた。

「紹介しましょう、カルロス閣下です」

レピカがそういった。今田は一瞬たじろいだ。そうか、と思った。木内は彼がどういう人物か、先刻承知のようだった。丁重に挨拶を交わした。カルロスの傍に寄り添うようにして立つ女性を、レピカは ミセス・オガワ と紹介した。小太りの身体を揺るようにして、自ら名乗ったもう一人男は工業開発省鉱山局長のエリアミーノだった。ひょうきんでなかなか愛嬌あいぎょうがある男だ。

それにしてもなぜここにカルロスがいるのか

実際、驚きだった。二人はたかだか総合商社の課長風情ふうせいにすぎない。それなのにカルロス自らが登場した。話の内容からすれば、レピカ社長で充分ではないか。そう今田には思えた。どうやら木内も同じ思いのようである。型通りお互いに自己紹介を兼ねた挨拶を交わしたあと、カルロスがおもむろにいった。

「遠い極東の日本からよくメキシコにいらっしやった。歓迎します。挨拶替わりといつてはなんだが、どうだろうか。この国でとれたワインでまず、親交を深めたいと思うのだが、賛成してくれるだろうか」

ゆつたりとしたキングズイングリッシュで言った。考えれば、初対面の席で酒をすすめられるとは、これもまた、今田にとっては初めての経験である。カルロス自身がよほどの酒好きなのか。さもなければ、これは我われに對するたいへんな歓待であると今田は思った。

「口にあうかわるか、それが問題だ」

カルロスはシェイクスピアの一節をもじって言ったのだろうが、大真面目な**も**のなので、ユーモラスに聞こえてくる。よく冷えた辛口のワインだった。芳醇な香りが口一杯に広がる。一呼吸おいて、カルロスが言った。

「関西商事はたいへんフロンティアの精神に富んだ会社だと私は聞いている。私の親しい日本の友人、ミスター・鎌谷は、そう君たちの会社を紹介した。君たちに会って、その印象は確実なものになった」

「閣下、たいへん恐縮に存じます」

どうもごちない。どういふ場面に出くわしても臆することがない、と思っ

いる今田だが、カルロスの態度に圧倒され、そういうのが精一杯だった。隣に坐る木内は吹き出る汗をしきりに拭っていた。

「わが国と日本との関係は最初の出会いから友好的なものでした。十七世紀の初めの頃の出来事だったと思う。ロドリゴ・デ・ビベロに乗せた船団がマニラからアカプルコに向かう途中、暴風に襲われて房総半島にうちあげられた時、当時の日本政府は丁重に彼らをもてなしただけでなく、わざわざ船をつくらせて無事メキシコまで送り届けてくれたこともありました」

カルロスの話は滑らかに続いた。伊達政宗がローマ法王庁に派遣した支倉常長はせくらつねながの使節団がアカプルコに到着した時、メキシコ国民は国賓なみに大歓迎したこと、さらに明治の初め、日本が列強との間に結んだ不平等条約に悩まされていたとき、最初に条約改定に同意したのもメキシコだった、とカルロスは言った。

要するにカルロスは日墨兩國は歴史的にも、いかに友好的な関係にあったかを強調したかったようだ。彼はさらに言葉をついでいった。メキシコは現在、経済的困難に直面していること、この危機を克服する上で、メキシコは日本の友好的な支援を期待している、ともいった。

「率直にいわせてもらうことにする。実をいうと、我われはごく最近、ある偶然のきっかけからこのメキシコに膨大な天然ガスが存在することがわかった。神の恵みである資源を活用して開発を進め、この国がしっかりと自立できる経済体制をつくり上げたい。そこで開発計画の一部を開西商事に手助けしてもらいたいのだが、あなたがたの協力は可能であろうか」

「天然ガス……でしたか！」

石油だと思い込んでいた。それが天然ガスだった。驚いた。それに開西商事を鎌谷自身が推薦したことは初めて聞く話だった。二人は思わず顔を見合わせた。カルロスはゆったりと順を踏むように言った。

「天然ガスはアメリカ人がみつけたものだが、どうも連中は人が悪い。その存在すら我われに報告せずに、彼らはこの国からさっさと出ていった。ただ、私はこの方面の専門家ではないので、詳しくはレピカ社長とエリアミーノ局長の二人に説明させることにしよう」

そういい終わると、カルロスはいかにも愉快そうに笑った。

「そうしますと、パイプは天然ガスの開発のために使われるのですね」

今田が改まった調子でそう言った時、ミセス・オガワが形よく組んだ膝の上にノートを広げ、繊細な文字でメモを取り始めた。どうやら話は本題に入ったようだ。カルロスには直接答えずに、レピカを促した。

「もう少し詳細な調査が必要なのだが……」と前置きしてレピカが説明した内容はこの二人を満足させるのに充分だった。天然ガスが発見された場所はバハカリフォルニア半島の突端、サンルカス岬から湾岸に百キロほど入った海底にある。深さは平均で二百五十メートル。埋蔵量は概査で十三兆から十五兆立方フィートという。立地条件はそれほど悪くはない。

世界最大と言われるクエートやカナダのガス田ですら八兆から十兆立方。これはまぎれもなく、世界最大の天然ガス田ということになる。この計算でいけば、可採埋蔵量は甘くみても十兆立方は下らないだろう。ビッグ・プロジェクトである。

「この天然ガスをバハカリフォルニア半島のマサトランとサンルカスの二カ所にパイプラインで運び、これを太平洋岸諸州の経済開発のエネルギー源として利用することを考えている」

レピカはほとんど資料に目を通さず、ただ、記憶を頼りに話していた。たいへんな記憶力だ。が、この天然ガスをいつたい何に使うのか、天然ガスの開発計画といつてもいろいろなのが考えられる。たとえば石油化学か、それとも液化計画か、発電用に計画するのか、産業用のエネルギー源にするのか。

「で、どういった計画を構想されているのでしょうか」

木内はすかさず質問を發した。木内の質問にレピカは一瞬戸惑ったような表情を浮かべ、どうすべきか、カルロスの方を窺ううかがようにしてみた。カルロスはゆっくりとワイングラスをまわしながら、軽く頷いてみせた。レピカは言葉を続けていった。

「まず、マサトランではこの天然ガスを利用した石油化学の基地を建設したい。第二にはサンルカスに輸出を目的とするメタノール生産の計画しています。優先させたいのはメタノール生産計画で、このうち最初の仕事になるのが、パイプラインの敷設工事です。つまりパイプラインの工事に関して、とりあえず検討をお願いできないか」

第一期工事は、天然ガス田のサイトからメタノール・プラントを建設するサン

ルカスまで、パイプラインを通す。続いて第二期工事では石油化学プラントを建設するマサトランまでパイプを敷設する……それがレピカが明かした天然ガス開発計画の概要だった。さらにメタノール火力発電も検討中だといった。

今田の頭にはあの細長いバハカリフォルニア半島の地図が浮かんだ。が、鉄道が通っているサンルカスはともかく、マサトランときたら、まるで未開発地域である。砂漠にプラントを建設するようなもので、インフラの整備だけでも膨大な投資が必要になることは明らかだった。資金調達だけでもたいへんな仕事になる。いったいどうするつもりか。

「いくつか質問をさせて頂いてよろしいでしょうか」

メモをとる手を休めて、言ったのは木内だった。

「構いません。遠慮なくどうぞ」

カルロスがにこやかに答えた。

「今、レピカ社長から伺った話ですと、計画を実現するためには膨大な資金を必要とします。すでに資金計画に目途をつけているのかという問題。第二はこのプロジェクトを推進する上で、メキシコ側は関西商事にどのような役割を期待されているのか、という問題です」

木内が質問したことは、いずれも基本的なことである。カルロスの態度はあくまで鷹揚^{おつよう}だった。笑顔を絶やさず、木内の聞きいつていた。そしてビクトリア朝の舞台劇風のジェスチャーで、再びレピカを促した。

「サンルカスのメタノール計画は我われとユーザーが協力して、これを合併事業として進めたいと思っている。もちろん、出資者はできる限り広く募^もり、この出資を建設費用に充^あてることを考えている。一方、マサトラン計画はメヒペトロが中心になって進めることにしているが、いずれの計画も基本的にはこのプロジェクトに参加することで恩恵を受ける外国企業が資金を負担すべきだと考えている」

それにまた、この計画を推進するためには日本政府のソフトな資金の協力も必要だといった。そこでレピカはいったん言葉を切り、記憶の糸を手繰^{たぐ}るかのような表情を浮かべた。隣の席の木内が必死でメモを取っていた。レピカは再び言葉をつないだ。

「関西商事に対する我われの期待、それはパイプライン計画を完成させる上で、

よきパートナーになって頂きたいということです。とりあえずパイプライン工事にかかわる見積書を早急に提出して下さい。メタノール・プラント計画や石油化学プラント計画は進捗状況に応じて改めて協力を願うことになるだろうと思う。ともかくこれだけ大きなプロジェクトなのだから関西商事がすべてを独占するのは、少し欲張りということではないかね」

最後にいったことは明らかに冗談のようだった。レピカはにやりと笑った。そしてレピカはプロジェクトをいくつかのフェーズに分け、海外企業に協力を打診中であると付け加えた。それは彼らが雇っているコンサルタントの薦めで決めたことであるともいった。

「つまり、メタノール・プラント計画の場合は日本のニック社に初步的なフィジビリティスタディ（企業化調査）をお願いしているほか、海底パイプライン敷設計画に関してはあなたがた関西商事と日管製鉄に協力を求めることにしたのです。とくにパイプライン工事は計画の最初のフェーズであるので、完成を急いでいます」

レピカが二人に示したデータを読む限りでは、天然ガス田からプラント・サイトまで直線距離で百五十キロ近くはある。それを途中でサンプルカスとマサトランの二方向に分岐させ、パイプを敷設ふせつするとなれば、全長は二百キロ程度にはなるはずだ。あのあたりだと水深は平均値でみても二百五十メートルはある。どのような方法で敷設するかにもよるが、建設費用はどんなに安く見積もっても十億ドルは下るまい。そんなことを今田は頭のなかで計算していた。

「我われが天然ガスの存在を知ったのはごく最近のことです。だから開発計画はまだ十分に煮詰められているわけではありません。これからしっかりしたデザインを固めなければならぬ、というのが正直なところです。いずれにしても詳細なマスタープランをつくり上げる必要があります。そうした面でもぜひ、関西商事の協力を願いたいと考えている」

「わかりました。ご期待に添えるよう努力したいと思います」

今田はそう短く答えた。カルロスは満足そうに頷き、そうしてもらおうとありがたいと言って、ゆっくりと立ち上がった。そして持たせている人があるのでといって、二人に握手を求めて、部屋を出ていった。

たぶん、彼女はカルロスの個人秘書なのであろう。日本風の名前を待つミセ

ス・オガワもカルロスのあとに続いた。部屋の外に出た二人を、レピカとエリアミーノが最敬礼の姿勢で見送った。カルロスが座をはずしたためか、和らいた雰囲気が出てきた。レピカはワインボトルを取り上げ、二人のグラスを満たした。エリアミーノもワイングラスを手にして、足を高く組み上げ、リラックスした態度になった。改めて見ると、口髭がよく似合うなかなかのハンサムである、四十代半ばの年齢に見えた。

「今田さん、それに木内さん。あなたたちに要請したいことは、このプロジェクトにクレジットを提供して頂くことです。クレジットとしては、できるだけ条件のよい公的金融を我われは期待している」

やや間をおいて、レピカが改まった調子で言った。パイプライン商談が出たときからファイナンス問題は予想されたことだが、コントリブリスクに対する懸念もあるのだ、これは厄介なことになりそうだった。いかに融資団を組成するかという問題と日本政府の輸出保険を適用させることができるかどうかだ。

「話の主旨は理解できました。さっそくパイプラインに関して見積り作業を始めたと思います。この作業を始めるには周辺地域の地質やガス田の構造がどうなっているかなど、詳細な技術データが必要とされます。準備はできているでしょうか」

この種のプロジェクトの場合は、まず、最初に簡単なプレフェース（企業化準備調査）を実施することが必要になる。そこで建設費用の概算をはじめだし、プロジェクトの収益バランスを確かめる。それにはプロジェクト遂行の前提になる詳細なデータが必要だ。具体的なデータがどこまで揃っているかで、たぶん、プレフェースの費用は、格段に違ってくるはずだ。今田が要求したのはそうしたプロジェクトに関するデータのことである。

「我われのコンサルタントが準備した報告書があります。たぶん、皆さんが要求されるデータはほとんどこの報告書のなかに含まれていると思います。これを差し上げましょう」

今度はエリアミーノが説明にあたった。彼は書類鞆から部厚い綴りの報告書を取り出した。報告書は英文でタイプしたものである。その報告書には天然ガスの推定埋蔵状況、ガス層構造、ガス圧力、ガス埋蔵量、ガス可採埋蔵量など必要とされる基本的なデータがすべて書き込まれているようだった。エリアミーノは

報告書の綴りをバラバラとめくりながら、ガス田の状況を簡単に説明した。両者の話し合いは、プロジェクトを遂行する上での細部にわたる協議に入ろうとしていた。エリアミーノはいかにも実務官僚らしく要領を得た話をした。

「ところで概算見積りとプレエフエスにはどの位の時間を必要としますか」

「そうですね、今、頂いた報告書にプレエフエスを作成する上で十分なデータが含まれているかどうかにもよりますが、最低でも半年程度は必要です。ともかく一度日本に戻って、エンジニアリング会社と相談した上で、正式に回答させて頂くことにしたい」

「半年ですか。実を言いますと、パテック社が中心となり、夏の終わり頃までに技術デリゲーションを日本に派遣する予定なのですが、それまでにある程度、どの位の資金を必要とするか、それを見極めておきたい。そういう事情もありますので、作業はできるだけ早く仕上げてもらいたい」

「パイプラインが通るルートの地質調査も必要です。地質調査とその解析だけでも、たとえ大型コンピュータを使って計算しても最低六週間はかかります。ですから半年と申し上げたのは、最低限、必要とされる作業日程です」

今田は中近東やタイなどで天然ガスプロジェクトを数多く手掛けてきただけにそこらあたりのことは熟知していた。たとえプレエフエスとはいえってもパイプライン敷設工事の場合は、慎重でなければならない。なにしろ起爆性の気体を長距離運ぶのである。ルートの途中に火山性のマグマでも吹き出していたらとんでもないことになる。調査は慎重に行わなければならない。今田はそうしたことを強調した。

「ルート周辺の地質データは完璧なものを用意することができる。このデータはメキシコ海軍が作ったものですから、まず信用して頂いて結構だと思います」

なるほど、そういうことか。このプロジェクトには軍部も協力しているということなのか。エリアミーノが言うように海軍が作ったデータならば、第一級のデータといって良いだろうと今田は思った。

「ご期待に添えるよう努力したいと思います。それからこのパイプラインの話は私どもに対する特命発注であると考えてよろしいのですね。もう一つ、ついにお聞かせ願いたいのは、オーナーズ・コンサルタントを引き受けているのはどこでしょうか」

「発注の件に関しては、まずあなたがたの見積もりを拝見してから決めたい。これはいずれわかってしまうことなので、申し上げておきましょう。西ドイツのボルギ社が我われのコンサルティング業務を引き受けています。この報告書も実をいうと、彼らと我われが共同で作成したものです」

今度はレピカが答えた。西ドイツのボルギ社は、最近、コンサルティング分野でめきめきと実績を伸ばしていた。が、天然ガスの分野でコンサルティング業務を引き受けるのは、これが最初の仕事のはずだ。彼らは今度は、天然ガスの分野にも触手を伸ばしてきたということであろう。

それはそれとして、どうやら彼らは関西商事をパイプライン敷設工事のプライムコントラクターに指名することには、まだふんぎりがついていない様子だ。そうだとすれば、テクニカル・ミッションの来日が勝負どころになるはずである。是が非でもそれまでに、プレフィージビリティスタディを仕上げておかなければならないと今田は思った。両者の最初の会談は終わりかけていた。

「あなたがたと東京で会うときは、お互いの協力関係がもう少し具体性を帯びていることを期待したいものです」

レピカはそういい終わると、立ち上がって二人に握手を求めた。三時間に及ぶ最初の折衝はようやく終幕を迎えたようである。レピカとエリアミーノは先に立ちドアまで二人を案内して、別れの挨拶を交わした、別れの挨拶は素っ気無いほど簡単なものだった。ただ、エリアミーノだけは二人をエレベーター・ホールまで見送った。

どこで油を売っているのか、運転手の姿が見えないことに苛立ちを覚えながら二人はホテルのロビーで待った。しばらくすると、運転手は例の愛想笑いを浮かべながら、二人を迎えにきた。二人を乗せたセダンは何事もなかったかのように速やかにホテルのゲートを出た。すでに太陽はポポカテペトルの山並みを真赤に染め上げ、どこまでも続く大地の彼方に沈みかけようとしていた。

カルロスが会談の場に現れたこと、これはまったく意外だった。やはり大きな仕事になりそうだった。そのことに二人は興奮を覚えていた。木内は車のなかで、幾度も首を振ってはため息をついた。二人を乗せたベンツはなだらかな斜面が果てしなく延びる国道に入ろうとしていた。

「今日の話でどうやら全体像が浮き上がってきたような気がする。それにしても

天然ガスとは、これは驚いた。しかし、問題はファイナンスだね。今のメキシコとあつては難しい」

「君が言うように厄介な仕事になりそうだ」

車内は相変わらず熱い興奮に包まれ、今日の会談を総括する二人の議論が続いていた。国道には車の数はそれほど多くはなかった。その二人の車に一定の距離をおいて、ぴったりとついてくる黒塗りのベンツがあった。運転している男はサングラスの陰に隠れて、定かには確認できない。が、よく見るとその男は大男のアメリカ人のようだった。二人はまったくそのことには気がついていないようだった。

(つづく)